

シカゴ学院におけるモーニング・エクササイズ (Morning Exercises) の目的と実際

岡田直俊

豊川市立 八南小学校

The purpose and fact of Morning Exercises in the Chicago Institute

Naotoshi OKADA

(Hachinan Elementary school)

1. はじめに

中野によれば、生活科・総合的学習の源流の一つとして、19世紀末から20世紀初頭にかけて米国にて展開された新教育運動があげられる¹。米国にて新教育運動を展開した人物は何名かいるが、デューイ (John Dewey) によって「新教育運動の父」²と評された人物がフランシス・W. パーカー (Francis Wayland Parker) である。

パーカーの教育の特徴の一つが「Morning Exercises」(以下、M・E)である。キャンベル (Jack K. Campbell) はM・Eを「パーカーのシステムの核心である。」³としている。村松によれば、M・Eはいつ頃始まったかは定かでないが、パーカーがクック師範学校 (the Cook County Normal School) 在職時から始まり、シカゴ学院 (the Chicago Institute) を経て、シカゴ大学教育学部 (the School of Education, University of Chicago) やパーカー・スクール (*Francis W. Parker School*) まで受け継がれたとされている⁴。このパーカーの教育の特徴とも言えるM・Eについて、具体的な実践まで含めて論究している研究と言えば、高田と佐藤である。高田は、パーカー教授学の社会的観点としてM・Eの実践を分析し、M・Eと教室とで有機的な関連が図られていたことや、M・Eを通じて、自己活動、興味、自発性、実物教授、責任ある自由、作業、社会的協同などが尊重されていたことを明らかにした⁵。また、佐藤もM・Eの実践を取り上げながら、M・Eがプロジェクト単元の開発の場であり、学習成果の発表の場であったことを明らかにしている。

しかし、これらの先行研究はパーカー没後のパーカー・スクールの実践を取り上げたものがほと

んどである。特にパーカー・スクールは1912年に「社会的動機」を中心概念とするなどの大きな方向転換を遂げており、この方向転換は批判も受けている⁶。この方向転換後に発行されたのが *The Francis W. Parker School Yearbook vol. II "The Morning Exercises as a Socializing Influence"* であり、パーカー・スクールのM・Eについてまとめられ、実践も詳しく載せられているが、実践を載せている教師の多くがシカゴ学院にはいなかった者である⁷。つまり、パーカーの死後、パーカーの教育を受け継いだものの、時代の変化に合わせてあり方が変化していったため、パーカー自身が望んだ教育活動になっていたかどうかは検討の余地があると言える。

では、パーカーが存命の頃のM・Eはどのように行われていたのか。本研究では、パーカーが指導した学校のうち、シカゴ学院を取り上げる。倉沢はパーカーのカリキュラム思想の発展を3つの時期に分けている。第一期が1875年に始まるクインシー運動から1890年頃のクック師範学校前期にわたる期間であり、地理をコアとする教科カリキュラムを示していた。第二期は、1890年代の中頃から1899年にシカゴ師範学校を退く頃までであり、カリキュラムの中心を子どもと位置づけ、教科カリキュラムから経験カリキュラムへと転回を果たした時期である。第三期は、1899年以降であり、新たに私立学校を設立して自由に新教育を展開しようとした時期である。この頃のパーカーは児童中心の見地に徹し、理論的には経験カリキュラムの立場を確信するものであるとされる⁸。

第三期において、パーカーはシカゴの篤志家ブレイン夫人 (Mrs. Emmons Blain) の支援を受け、

私立の学校を設立する。これがシカゴ学院である。幼稚園から教員養成課程まで有するこの学校は、1900年の10月に開校された。しかし、開校してから1年後の1901年にシカゴ大学の教育学部の設立に合わせて、シカゴ学院がシカゴ大学に合併されることとなった。そこで、パーカーは再びブレイン夫人の支援を受け、私立の学校であるパーカー・スクールを設立するが、翌年の1902年にパーカーは亡くなってしまった。

このようにシカゴ学院は、パーカーが子ども中心の経験カリキュラムの見地に徹し、自身が存命中に私立学校の学校長として自由に教育を展開することができた唯一の学校である。岡田はシカゴ学院の時間割に着目し、パーカーの中心統合法とシカゴ学院の実践の関連を分析している。その中で、M・Eにも言及しているが、毎日行うように位置づいていたこと、全校の児童、生徒、教職員で行っていたことに留まり、その目的や具体的な実践までは触れていない⁹。

そこで、本研究では、パーカーがシカゴ学院の教育において、何のためにM・Eを行ったのか、また、実際にどのようにして行われたのかを分析することを目的とする。

なお、本研究ではシカゴ学院のM・Eの実際について検討を加える資料としてシカゴ大学の特別資料室に貯蔵されている *Chicago Institute Collections*にあるM・Eの資料を用いる¹⁰。なお、この資料には1900年11月の数日分と1901年1月の数日分の様子が記載されている。この数日分が残された経緯は分からないが、シカゴ学院の機関誌『コース・オブ・スタディ』(*the Course of Study*)に記載されているM・Eの主題一覧と内容が一致していることから、当時の様子を表した資料であると言える。

2. シカゴ学院におけるM・Eの位置づけ

(1) シカゴ学院における教育の目的

シカゴ学院におけるM・Eの目的を検討する上で、シカゴ学院における教育の目的を検討する必要がある。なぜなら、M・Eは教育活動の一環であったからである。

シカゴ学院における教育の目的について、パー

カーは以下のように述べる。

理想の学校は理想の共同体である。理想の社会とは、民主主義である。この民主主義とは、この意味深長な言葉の中で最も純粹な意味である。共同体での生活の中で、完成した生き方の中で、市民としての身分の中で絶えずそれ自身を実現している品性は、直接的で永続的な目的であり、そしてただ唯一の学校の目的である¹¹。

このように、パーカーはシカゴ学院における教育の目的を品性の陶冶と考えた。学校とは社会そのものであり、民主主義的な学校こそ理想の学校と考えたのである。

また、パーカーは品性の陶冶という考えは以下の十の信条から生じたと述べる。ここでは、そのうちから、民主主義社会や共同体に関わるものを取り上げる。

まず、二番目の信条について、パーカーは「共同体の生活の正しい理想は、すべての人間に遊びや正しい演習に向かうエネルギーをもたらす。」¹²と述べる。『教育学講話』でパーカーは、子どもはエネルギーの複合体であり、外界のエネルギーと作用・反作用しながら、概念を獲得していくと述べている¹³。また、教師の条件は子どもの発達するための最適な条件をそろえることだとしている¹⁴。つまり、共同体とはすなわち学校であり、民主主義的という理想的な共同体になったとき、この教師の条件が達成できると考えられる。

第三の信条は規律、調和、優しい愛は適切な環境下や、精神的な生活の中の閃きから成長し、発展し、それらは、外側からの要求と内側からの必要感の関係から引き出されるということである¹⁵。これも先述したように、自身のエネルギーと外的エネルギーの相互作用によって規律、調和、愛が発達するのであり、適切な環境すなわち外的エネルギーが作用する条件を整えることが大切であるということが言える。

五番目の信条では「市民性の義務は生活の習慣になるべきだ。他人のために、考えること、働くこと、することは、それらの質を磨き、共和国と

しての我々の存在を脅かす不足を埋める。」¹⁶としている。このように、品性の中でも特に、他人のために考えたり行動できたりすることを求めているのである。

第八では発達の傾向について述べている。「適切な個性の発達を通して、身勝手な傾向はなくなるだろう。」¹⁷とあるように、上記の発達を経て、人は身勝手ことをしなくなると考えた。

第九では「すべての子どもは、他者を助けることへの知識と技能の使用を通して、一度そして、いつも生きることと生活の最高の目的を感じるだろう」¹⁸と述べる。先述したように、パーカーは知識技能を習得することを目的としたカリキュラムに対抗した。知識や技能を習得することを目的とするのではなく、他者を助けることを目的として知識や技能の習得を目指したのである。そして、そのような教育に対して、第十の信念として「そのような教育は、発達のどのような段階でも完全にモラル的である。」¹⁹と述べるのである。

以上を踏まえると、シカゴ学院において、子どもの発達を適切に導くためには、子どもたちの周りの環境を整えることが必要であり、学校を民主主義的な社会にすることはその環境を整えることに繋がると言える。また、そのような社会の中で他人のために考え、行動すること、他者を助けようとするのが教育の目的である品性の陶冶につながると考えられたのである。

(2) シカゴ学院における M・E の目的

シカゴ学院では、学校という共同体を民主主義的で理想的な共同体にしようとしたことが分かった。では、その中で M・E はどのような役割を果たしたのだろうか。そこで、パーカーの記述からシカゴ学院における M・E の目的を分析する。

『コース・オブ・スタディ』の中にパーカーが M・E について言及している記述がある。その中でパーカーは以下のように述べる。

学級や学年において、年齢や発達段階のような似た傾向、願望、興味は教師にとって、小さな共同体を、協力や援助の基礎となる美しい生活にまとめることを可能にする。M・

E において、学級や学年のよいこと全ては学校全体のより大きな生活へと送り出されるだろう。だれかが「一体感」は新世紀のモットーであると言った。M・E は「一体感」を意味する。今、幼稚園の子ども、小学校の生徒、中等学校や養成学校の学生、教師は幸せで有益な 20 分の中に入り混じる。全員が活動的になり、助けが必要なときには援助する準備をしている²⁰。

シカゴ学院にとって、学級や学年は授業を行う上で一つのまとまりであった。このまとまりを小さな共同体と捉え、他者のために行動する「協力」や「援助」をする基礎を身につけることを図ったと言える。そして、M・E として全校があつまる機会を設け、その中で交流することにより、学校という大きな共同体でも協力や援助が発揮できるようにしたと考えられる。つまり、M・E の目的は、学級や学年単位での共同体だけでなく、全校としてのより規模の大きな共同体においても他者のために行動する力を養うことであったと解釈できよう。

しかし、パーカーがねらったのはこれだけではない。M・E の主題 (subject) においても教育的なねらいが存在する。まず、基本的な主題は子どもたちの学習から生じる。パーカーも「集められた社会に与えられる全ての主題は授業や学年における生活から生じるべき (実際には開花) である。どのような方法でも学校における本質的な活動から無関係のものはない。ショーや展覧会のような試みはあってはならない。」²¹と述べるように、シカゴ学院の M・E は基本的に普段の学習からその日の主題が選ばれたようである。日によっては、すでに決められた主題になることもあったようである。まず、何かの記念日など特別な日の場合はその日のことを扱った M・E になったのである。これは、その日の話をする中で教育的価値が生まれるためである。例えば、ワシントン大統領とリンカーン大統領の誕生日には彼らの話をしている。ここでの狙いは「ワシントンとリンカーンの人生は子どもたちの心に、二人の偉大なアメリカ人の知恵と愛と忍耐と愛国心の力をもたらす。パ

ンカーヒルの戦いやレキシントンの戦いは、神聖な戦いにおける団結の価値を示すだろう。全ての歴史は私たちに、どれだけ血と犠牲がかかるかを深く感じさせるだろう。」²²というところにある。つまり、子どもたち同士のかかわりだけでなく、品性の陶冶につながる教訓を主題の内容から得られることもあるということである。特別な日としてはこのほかにも、感謝祭 (THANKSGIVING) やクリスマス (CHRISTMAS), イースター (EASTER.) などが挙げられている²³。

また、子どもたちは他の効果も期待されていた。M・E において、子どもたちは自分の学んできたことを発表する機会が設けられる。そこで、子どもたちは全校の前で話すことをしなければならない。このことについてパーカーは、「話し手や読み手の任務は、何を話しているかを集会場の全員に理解させることである。M・E は自制心と敬意を表する同感的な注意の機会もまた提供する。」²⁴と述べており、全校の前で話すことも品性の陶冶につながっているのである。

さらに、M・E の時間にはまた別の効果も期待されていた。M・E には行進の時間が設けられていた。これは、M・E の時間が 20 分しかないために素早く移動することが求められたからである。しかし、行進についてもパーカーは「時間を節約する他にも、行進は規律と自制心を促進し、火事の場合に事故なく建物から非難することを学校全体で可能にする。行進の効果は生徒に以下の規則を守らせることである。歩み続ける。距離を保つ。胸を張る。口を閉じる。」²⁵と述べている。

以上のように、シカゴ学院において、M・E はいくつかの目的をもって行われていた。簡単に挙げれば、「他学年においても協力や援助をする機会を設けること」、「M・E の内容から品性の陶冶につながる教訓を得ること」、「全校の前で話すことで自制心と敬意を育むこと」、「行進することで規律と自制心を促進すること」である。

では、シカゴ学院では実際に M・E がどのように行われていたのか。次節では、シカゴ学院における M・E の実際の様子について検討する。

3. シカゴ学院における M・E の実際

(1) 1900 年 11 月 7 日の M・E

前節でシカゴ学院における M・E の目的を四つに分けて表した。本節では、これらの目的が具体的にどのように達成されたか、あるいはされなかったかを検討する。

シカゴ学院の M・E が主に 5 つの流れでできている。それは、「1. 全校での歌、2. 担当教師による主題の発表とそれに関連する読み物等の紹介、3. 全校での歌、4. 教師による講演か他学年の出し物。5. 行進。」という流れである。なお、主題は事前に割り当てられた教師が決めており、その日の担当の教師は主題に沿った読み物等を用意する必要があった。

1900 年 11 月 7 日は資料の中で一番古い記録であり、まだシカゴ学院が開校してから 1 か月程度しか経っていない状態である。この日の M・E の流れは以下の通りである。

1. 「Como Thou Almighty King」を学校全員で歌う。
2. マーシャ・フレミング (Miss Martha Fleming) による朝のための主題の発表。
3. 学校全体の歌。
4. パーカーの講演。
5. 行進。²⁶

2 では主題が「世界の美しい都市」であり、フレミングの用意した美しい都市に関連する聖書の一部や詩が読まれた。また、3 と 4 の間には、シカゴ学院の中等部の生徒の多くがどのようにしたら都市の建物や道をきれいにきちんとするもができるかということについての自分の考えを述べた。また、何名かはいつ観ても最も美しい建物について述べた。最後のパーカーの講演は以下のような内容であった。

「家についてもっと聞きたいことがある。美しいといえる、家の外側のものはある。美しいといえる、家の外側のものはある。それなら、家の内側の内側に美しいと言えものがある。内側の内側には何がある。」
ある生徒が答えた。「人々です。」

「その通り。」とパーカーが言った。

「そう、内側の内側とは人々である。私たちは今日何ができるか、明日何ができるか、次の雨の日は何ができるかを見よう。私たちは全てをきれいに美しくしようとする管理人を持っている。ひょっとしたら、私たちの何名かは、私でさえも、雨の日は建物に入る前に足をぬぐわないかもしれない。私たちが私たちの建物をきれいにしようとするためにより気を配り、全力を注ごう。」²⁷

このM・Eの様子を前節の4つの目的に照らし合わせてみる。他学年との協力や援助は見受けられない。また、話し方や読み方についての指導があったかどうか分からない。しかし、パーカーの講演の話から、品性の陶冶につながる教訓を得ることはあったと言える。また、行進が行われていることから、4つ目の「行進することで規律と自制心を促進すること」は行われていたと言える。

(2) 1900年11月8日のM・E

翌日の11月8日はグールド (Mr. Gould) が担当であり、主題は「現在の文学」であった。グールドはここで興味深いことを述べている。

私が11月9日のための自分の主題を「現代の文学」にしたとき、私は金曜日が11月9日だと思っていた。不幸な日だ。教師のうちの一人は、彼女の生徒の何名かに近頃出版された新しい本を説明してもらうことで私を助けることを約束している。しかし、これらの生徒は金曜日のために準備しているために今朝の準備はしていない。私はあなたたちにとっても簡単に「オズの魔法使い」の最も興味を引く部分を伝える。プレゼントとしてオズの魔法使いを送られた小さな女の子が私に読んでくれたことを通して、私はオズの魔法使いを聞いた²⁸。

グールドは自分の担当が11月9日だと勘違いしており、それによって失敗に終わっているが、大切なのはその金曜日に子どもたちに発表の

依頼をしていることである。シカゴ学院におけるM・Eには、子どもが子どもを助ける協力や援助だけでなく、子どもが教師を助ける協力や援助もあったということが分かる。学校は理想の共同体であるべきであり、他者のために行動するという理念を考えたときに、当然それは子ども同士だけでなく、教師と子どもの間においても成り立つ関係であるべきというパーカーの理想が見て取れるのである。

また、このグールドの話の後、パーカーは再び講演している。そのときの話は以下の通りである。

よい物語だった。私たちは心臓や脳を持っているか？持っている？

それらはブリキではないか、それともわらではないか？じゃあ、私たちは朝刺激を受けることができる。静かに優しく言おう。「全てのは助けられる。隠されたものはない。」あなたは今朝、刺激を受けよう。授業が始まるとき刺激を受けよう。それを試してみよう²⁹。

パーカーはオズの魔法使いの内容になぞらえて子どもたちに話をしている。グールドがオズの魔法使いについて話すことは急遽決まったことであるため、パーカーのこの講演も急に話す内容を考えたと言える。このことはM・Eにおいて教師は現場の状況に合わせて柔軟に対応して話したということである。また、先ほどと同様に、パーカーの話から教訓を得るということを行っていることが分かる。

(3) 1900年11月14日のM・E

前日である13日のM・Eでは、シカゴの流星が主題であった。ちょうど13日の夜から14日の朝にかけて流星群が見やすくなっていたようである。次の日の14日のM・Eの主題は本来なら「製本」でウォーレン (Miss Warren) が担当であった³⁰。しかし、M・Eの記録を見ると、パーカーが話をしているため、急遽変更したことが分かる。パーカーが話したことは以下の通りである。

今、私は流れ星について聞きたい。夜遅くまで起きていた人たちは何を見たか私たちに教えてほしい。今朝、私は家から学校までの道で流星を見つけようとしたが、一つも見つけられなかった。

学校の違う人が昨晚の観察で成果を得た。何名かは他の人が何も見ていない間に流星を見ることに成功している³¹。

パーカーの流星の話は、昨日の流星の話の続きだということが分かる。このようにあらかじめ決められた主題と担当でも、子どもの様子や話題によって柔軟に変更していたと言える。

パーカーは続けて自分の陸軍の頃の逸話を持ち出した後に、以下のように子どもたちに呼びかけている。

今、子どもたち、あなたたちはきちんとまっすぐに座っているか？床に足をつけているか？やる価値があることは正しくやる価値がある。今、行進のときに、あなたたちの全力をしてほしい。与えるべき規則は少ししかない。少しだけのルールを知ってほしい。

口は閉じる。止まる。他の人から距離を保つ。胸をはる。

子どもたちはこれらの規則を繰り返すように言われた³²。

これは行進で目的とする内容を示している。なぜ流星の話に続けてこの話をパーカーがしたのかは、行進の様子を示す資料がないため分からないが、規則を守ることと呼び掛けているということは規則を守ることがその時点では重要であったことが分かる。

(4) 1900年11月21日のM・E

この日のM・Eの主題は「シカゴの地域の地理的な物語」だった。しかし、教員であるペイン(Miss Payne)から感謝祭に向けて、必要とする人に送るために服を持ってきてほしいことが伝えられた。パーカーもこの取り組みを評価し、子どもたちに参加することで他人も自分も幸せにできることを

伝えている³³。

感謝祭は第2節で述べたように、特別な日にあたる。他者のために服などを寄付する行為を行うことはパーカーの期待する他者を助ける行為にほかならない。このように、M・Eの時間を通じて、他者を支援する取り組みも行われていたことが分かる。

(5) 1901年1月10日、15日のM・E

これまで示してきたM・Eは1900年11月のものであり、まだシカゴ学院が開校して日が浅いためか、子どもたちが授業から持ち寄ってくるものがあまりなかった。しかし、1月のM・Eの様子を見ると、子どもの学習とリンクしながら、その成果を発表するようになっている。例えば、1901年1月10日のM・Eでは、第六学年の子どもたちが、歴史科の授業で勉強しているマルコポーロについて発表や議論を行っている³⁴。

一方で、第六学年の授業を見てみると、1月は歴史科の授業でマルコポーロの都市であるヴェネツィアについて勉強している。また、2月は地理科の授業でマルコポーロが訪れた国々を調べている。このM・Eがどのように学習に凡例されたかは分からないが、M・Eでマルコポーロを紹介する活動は子どもの学習から生じたことであり、それが次の学習につながったことを示唆すると言える。

また、子どもが活躍する様子が別の日のM・Eでも見られる。1901年1月15日のM・Eである。この日のM・Eでは、第七学年と第八学年の子どもたちがある詩人についてのヒントを挙げていき、他の学年の子たちに答えてもらうという催しをしていた。第七、八学年の子たちのヒントは、出身地やどこに関わる詩を多く書いたのかなど、その人物にまつわるものであった。10人がヒントを出し、答えが分かった人に挙手を求めると半分近くが手を挙げた。ある小さな男の子を指名するとその子は見事正解を言い当てた。正解した理由は図書室でその詩を読んだからというものだった³⁵。最後にジャックマンが以下のように述べる。

ジャックマン先生は生徒のよい朗読をほめ

彼は言った。原稿を読むために下を見ることはのどを締め、自由に声を出すことができなくなってしまう。聴衆をまっすぐに見ること、ノートを使わないことが最もよいことである。それらの規則に気づくことで、生徒はこの点で最も良いM・Eの一つを与えることに成功する³⁶。

前節で示したM・Eの目的の一つに「全校の前で話すことで自制心と敬意を育むこと」があったが、ジャックマンはまさにパーカーのこの目的に沿って、上記のような話をしていると言える。

普段の学習でこの詩人を取り上げたのは、11月の一度きりであり、子どもたちのこの月の実践とリンクしないため、なぜこのような催しになったのかは分からないが、M・Eの目的に照らし合わせるならば、相手を楽しませるために問題形式にした発表をする第七、八学年の子たちの行動と、その行動に答えて挙手をした聞き手側の子どもの行動は、互いに助け合う関係であり、援助し合う関係であると言える。

ジャックマンはM・Eについて子どもたちに「最もよいM・Eは学校全体の一部で最も多くの自発的な参加があることである。」³⁷と述べている。このようにお互いの参加が大切な取り組みであり、自発的に行うことこそ、理想の社会、理想の市民性の育成につながると考えられる。

これまで、シカゴ学院におけるM・Eの実際の様子を見てきた。1900年11月の実践では、開校間もないためか、教師の用意した読み物を中心にM・Eが進むことが多くあったが、1901年の実践を見ると、子どもたちがマルコポーロについて発表したり議論したりしていること、詩人についてのクイズを出していることなど、子どもたちが活躍する実践が増えてきていることが分かる。

シカゴ学院におけるM・Eの実践をまとめると以下のことが指摘できよう。

一つ目に、パーカーが考えたM・Eの4つの目的は、M・E内での活動や教員の講話などを活用することでその達成を図ったことである。行進だけでなく、クイズなどの出し物や議論など人前で話すようになっている。また、そのような出し物

の後に教師の講話で子どもの行動を価値づけたり、教訓を得られるようにしたりすることで、品性の陶冶を目指していたということが分かる。

二つ目に、主題については学年の学習と関連が見られるものもあれば、関連が見られないものもあるということである。このことについては、あくまで現在の資料で判断できることであるため、今後更なる検討が必要である。

三つ目に、開校から時間が経つにつれ、子どもたちが活躍する機会は増えていったということである。シカゴ学院が合併してシカゴ大学の教育学部とその附属学校になった1901年の11月には、学校の機関誌に再びM・Eについて言及がされているが、その中に、時間が経つにつれてM・Eは形式的な物からシンプルで自然なものになり、提案、質問、経験は、学校の体からより自由に、自発的にもたらされるとされている³⁸。シカゴ学院でもそのような傾向が見られたため、1901年の6月にかけてより自由で自発的なM・Eになっていた可能性が示唆できる。

4. おわりに

まず、本研究の成果を述べる。

シカゴ学院におけるM・Eの位置付けについて、品性の陶冶を目指すパーカーは、M・Eの目的を「他学年においても協力や援助をする機会を設けること」、「M・Eの内容から品性の陶冶につながる教訓を得ること」、「全校の前で話すことで自制心と敬意を育むこと」、「行進することで規律と自制心を促進すること」と考えたことが分かった。また、シカゴ学院において、M・Eの主題は子どもの学習から生じるか、特別な日のものとしており、高田が指摘するように「社会が要求するもの」³⁹という記述はなかった。また、高田はM・Eの語られざる目的に表現力を培うということ⁴⁰も挙げているが、シカゴ学院においてはその言及もされていなかった。前者は1912年にパーカー・スクールが「社会的動機」を中心とする指導理念に方向転換したためだと考えられる。後者の記述が掲載された当時パーカーはまだ存命だった。そのため、後者のような指摘が生じてしまうのはシカゴ学院の実践をもとに改良した結果、表現という

目的を加えるに至った、つまり M・E も発展している過程の途中であったと考えられる。

また、シカゴ学院における M・E の実際の様子を検討することで、パーカーが考えた M・E の4つの目的は、M・E 内での活動や教員の講話などを活用することでその達成を図ったこと、主題については学年の学習と関連が見られるものもあれば、関連が見られないものもあるということ、開校から時間が経つにつれ、子どもたちが活躍する機会は増えていったということが明らかとなった。

続いて、今後の課題について述べる。

一つ目は、前節でも述べたように、シカゴ学院の各学年の学習と M・E がどのように関連していたかということである。佐藤はパーカー・スクールにおける M・E の主題をプロジェクト学習の主題として捉えているが、シカゴ学院においては M・E での活動がプロジェクト単元のような学習のまとまりを形作るほど、学習の中で重きを置かれていたかということについて検討の余地がある。なぜなら、『コース・オブ・スタディ』に掲載された毎月の各学年の学習の進捗報告の中に、M・E の記述はほとんど出てこないからである。M・E と学年の学習の関連を検討することは、パーカー亡き後にプロジェクト単元と深く結びついていく M・E の発展過程をより鮮明に描き出すことにつながると思われる。

二つ目は、クック師範学校時代から M・E がどのように変化したかということである。このことを明らかにすることはパーカーの教育思想が公立学校と私立学校でどのように変化したのか、パーカーが体現したかったものは何かという問いにつながり、さらには、パーカーの教育思想やシカゴ学院における教育活動の更なる解明につながるためである。

M・E はパーカーの教育の特徴でありながらも、その実態があまり明らかになっていない。教科教育の枠に当てはまらない教育活動だからこそ、シカゴ学院全体の教育の中で M・E を捉え、シカゴ学院の教育の更なる解明につなげたい。

【引用・参考文献】

1 中野真志「2. 欧米における新教育運動の思想

と歴史」日本生活科・総合的学習教育学会編『生活科・総合的学習辞典』、溪水社、2020年、pp.6-7。

- 2 John Dewey. "How Much Freedom in New York," 1930, Jo A. Boydston (Ed.), *The Later works of John Dewey: 1929-1930*, Vol.5, Southern Illinois University Press, 2008, p.320.
- 3 Jack K. Cambell, *Colonei Francis Parker The Children's Crusader*, Teachers College Press, 1967, p.219.
なお、キャンベルは M・E を「assembly」と表記しているが、コース・オブ・スタディの中でそのように表記している箇所はないため、本研究でも M・E とした。
- 4 松村將『シカゴの新学校』法律文化社、1976年、pp.173-175。
- 5 高田喜久司「F.W.パーカー教授学の社会的観点—Morning Exercise について—」東京教育大学教育方法談話会『教育方法学研究』(6)、1983年、pp.51-69。
- 6 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究—単元学習の創造—』、東京大学出版会、1990年、pp.58-59。
- 7 *The Francis W. Parker School Yearbook*, vol. II "The Morning Exercises as a Socializing Influence," 1913.
- 8 倉沢剛『米国カリキュラム研究史』風間書房、1985年、pp.120-121。
- 9 拙稿「パーカーの中心統合法とシカゴ学院の関連—シカゴ学院の時間割を手がかりとして—」日本デューイ学会『日本デューイ学会紀要』第61号、2019年、pp.81-90。
- 10 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1900-1901.
- 11 Francis Wayland Parker, "The Plan and Purpose of the Chicago Institute," *The Course of Study*, vol.1, No.1, The University of Chicago Press, 1900, p.10.
- 12 *Ibid.*, p.10.
- 13 Francis Wayland Parker, *Talks on Pedagogics, An Outline of the Theory of Concentration*, E.L.Kellogg & Co, 1894, pp.4-5.
翻訳にあたり、梅根悟、勝田守一監修、西村誠、清水貞夫訳『中心統合法の理論』、明治図書、1967年)を参考にした
- 14 *Ibid.*, p.25.
- 15 Francis Wayland Parker, op. cit., 1900.
- 16 *Ibid.*, p.10.

- 17 *Ibid.*, p.10.
- 18 *Ibid.*, p.10.
- 19 *Ibid.*, p.10.
- 20 Francis Wayland Parker, "Morning Exercises," *the Course of Study*, Vol.1, No.7, The University of Chicago Press, 1901, p.599.
- 21 *Ibid.*, p.599.
- 22 *Ibid.*, p.599.
- 23 *Ibid.*, pp.599-600.
- 24 *Ibid.*, p.600.
- 25 *Ibid.*, p.601.
- 26 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises. Wednesday. Nov. 7, 1900," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1900a, pp.1-4.
- 27 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, *Ibid.*, 1900a, p.4.
 なお、実際の資料には引用箇所のパージ数が p.3 と書かれているが、この資料は4枚あり、引用箇所は4枚目にあたるため、p.4 と表記する。
- 28 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises. Nov. 8, 1900," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1900b.
- 29 *Ibid.*
- 30 "Morning Exercises," *The Course of Study*, vol.1, No.3, The University of Chicago Press, 1900, p.253.
- 31 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises. November. 14, 1900," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1900c.
- 32 *Ibid.*
- 33 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises. Wednesday Morning, Nov. 21, 1900," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1900d.
- 34 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises January 10, 1901," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1901a.
- 35 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises January 15, 1901," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1901b, pp.1-3.
- 36 *Ibid.*, p.3.
- 37 The Chicago Institute, Academic and Pedagogic, "Morning Exercises January 11, 1901," *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.3, the University of Chicago Library, 1901c, pp.1-2.
- 38 Bertha Payne, "The Morning Exercises," *The Elementary School Teacher and Course of Study*, The University of Chicago Press, 1901, p.173.
- 39 上掲書 5, p.56。
- 40 前掲書 5, p.57。